OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	COVID-19 禍におけるステレオタイプが高齢者に与える影響に関する考察 : Stereotype Embodiment Theory に着目して
Author(s)	菊地, 亜華里
Citation	生老病死の行動科学. 2021, 25, p. 29-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83194
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

生老病死の行動科学 2021 年　第 25 巻　pp.29 - 36

研究ノート
Research Note

COVID-19 禍におけるステレオタイプが高齢者に与える影響に関する考察
―Stereotype Embodiment Theory に着目して―

Impact of stereotypes in COVID-19 related confusion to the elderly through the lens of Stereotype Embodiment Theory

（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）菊地　亜華里[1]
（Osaka University, Graduate School of Human Sciences）Akari Kikuchi

Abstract

In COVID-19 related confusion, elderly behavior has been viewed as problematic, resulting in increasingly negative age stereotypes. Therefore, this paper considers the psychological factors influencing elderly behavior through the lens of Stereotype Embodiment Theory. Based on this theory, age stereotypes can be perceived unconsciously by the media and can influence the elderly through psychological pathways. Additionally, an increase in self-relevance due to criticism and other indications received from the media and people can also impact this process. In the future, it is necessary to empirically research the behavioral aspects of elderly people as outcomes and to examine this process in more detail.

Key words: COVID-19, age stereotype, Stereotype Embodiment Theory

1. はじめに

2019 年の末に発生した新型コロナウイルス感染症（coronavirus disease 2019, 以下 COVID-19）は，その後瞬く間に世界中に広がった。COVID-19 の流行によってあらゆる活動の自粛が要請され，学校に通えなくなったり，仕事ができず収入がなくなってしまったりと，人々の生活にさまざまな影響がもたらされた。友人や家族との交流やワークスタイルなどの面では，オンライン化やリモートワークなどの新しい様式を取り入れざるを得ない状況があり，人々の暮らしの中でさまざまな変化が生じている。日本での本格的な流行が始まってから半年以上が経過した現在では，身体的距離の確保や「3 密（密集，密接，密閉）」の回避等を含む「新しい生活様式」（厚生労働省 online: 0000121431_newlifestyle.html）が人々の中に浸透し，「ウィズ・コロナ」の時代として，生活スタイルの変化に社会が徐々に適応している様子がうかがえる。一方で，流行し始めたばかりの頃は，日用品の買い占めやマスクの転売等の問題行動も多く見られ，未知のウイルスの流行によって社会が混乱している様子が見て取れた。近年では，開発等により未知の病原体に遭遇する機会が増え，毎年のように新興感染症が出現している（厚生労働省 online: 1-2.pdf）。例えば，日本国内でも毎年のように流行し，一定数の死者を出しているインフルエンザなどは，誰もが名前を耳にする身近な感染症と言える。インフルエンザについては，これまでにワクチンや治療薬が開発されており，ある程度の予防が可能と言える。一方で COVID-19 は，人々にとっ

[1] Correspondence concerning this article should be sent to; Akari Kikuchi, Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Osaka, 565-0871, (u232879d@ecs.osaka-u.ac.jp)

て未知のウイルスであり，ワクチンがないために予防が難しく，有効な治療薬もまだ開発されていない状況であることから，人々の恐怖や不安をより一層強く喚起したと考えられる。

このように社会全体が不安に包まれ，自分自身や身の回りの人々の健康や命が危険にさらされているという状況で人々がとる行動というのは，多少なりとも平常時とは異なる。心理学の領域ではこれまでに，情報の授受や購買行動，他者への攻撃行動などに注目した研究がなされてきた。例えば，東日本大震災後の人々の行動に着目した研究（関谷, 2012）によると，震災後の人々の間では，情報を過剰に発信・受信しようとしたり，支援や団結を求めたり，他者への攻撃に転嫁したりするという行動が見られ，これらは人々が不安を解消するために行なった行動であるということが示唆されている。今回の COVID-19 流行下についても，どのような行動が見られ，その背景にはどのような心理的要因が影響しているのかを検討することで，社会の混乱を招くことなく事態に対処していくための手がかりが得られると期待される。

社会の人々の行動について検討するにあたり，現代の日本が超高齢社会の真っ只中にあるという状況を踏まえて考えたい。2020 年の時点で高齢者は人口全体の 28.7%を占めるようになり（総務省統計局 online: topi1260.html），そのうちの多くが健康的で自立した生活を送っている。そのため，高齢者の行動が社会に与える影響は以前よりも大きくなっていると考えられる。さらに，平均寿命が延伸しているということも踏まえると，生きてきた時代背景や健康状態等において，高齢者の中にも多様性が生じてきていることは自明である。このように，多様な背景をもつ高齢者の行動の実態や心理的側面に注目することは，これまでの研究にはなかった重要な視点であると考えられる。

したがって，本稿では，COVID-19 禍[2]における高齢者の行動を取り上げ，平常時との比較をしながら，その行動に影響を与える心理的要因について考察を行う。

2. COVID-19 禍で高齢者がとる行動

2.1. 社会の認識

まず，COVID-19 禍で高齢者がとる行動について社会の中ではどのように認識されていたのか，COVID-19 禍での報道や市民の意見の内容をもとに整理する。ここでは，高齢者の行動やそれらに対する意見について言及しているインターネットニュース等を参照する。

まず，2020 年 3 月 31 日のニュースでは，高齢者がスーパーマーケットやドラッグストアで朝早くから列を作り，トイレットペーパーや冷凍食品などの商品を買い占めたり，周囲に対して排他的な態度をとったりしていたと記されている（MSN ニュース online: ar-BB11W55a）。他にも，COVID-19 流行後にもかかわらず海外旅行にでかけて感染した高齢者集団の話や，日本初の集団感染の場となったダイヤモンドプリンセス号下船後に飲食店やジムを利用した高齢者の話などがまとめて取り上げられており，高齢者があまり好ましくない行動をとっているという認識が広まっていたと言える。

人々には，ある人を年齢や性別のような容易にかつすばやく識別できる特徴によってカテゴリー化し，そのカテゴリーのメンバーに典型的だと信じられている性質をその人に帰するという思考傾向があり，これはステレオタイプ化と呼ばれている（Taguiri, 1969）。先に挙げたニュースのように，限られた例から高齢者全体の特徴を述べるような報道は，まさにステレオタイプ的な思考傾向の現れだと言える。

また，COVID-19 をきっかけに世代間の対立が顕著になったという見方もある。極端な例ではあるが，海外の一部の若者は，ベビーブーム世代，つまり，日本で言う団塊の世代が多く犠牲になっていることから，新型コロナウイルスのことを「ブーマー・リムーバー」，すなわち，ベビーブーマー除去剤と呼んでいるという話が取り上げられている（産経デジタル online: lif20032820000037-n1.html）。世代間においては，年金や介護，雇用等を巡る問題が近年特に顕在化してきている。今回 COVID-19 禍で，世代

[2] 通常「コロナ禍」。新型コロナウイルスが招いた災難や危機的状況を指す（NHK online: 20200701_4.html）。

間の対立や高齢者へのステレオタイプ的な思考が強化されたことには，このような背景も関係していると考えられる。

2.2. 実際の行動

次に，実際に高齢者がとっている行動について，いくつかのデータを参照しながら整理する。平常時との比較や，他の年齢層との比較を行いながら，COVID-19 禍における高齢者の行動について検討する。

2020 年 5 月 2 日の ITmedia ビジネスオンラインには，全国のドラッグストアでの人々の購買行動を POS（販売時点情報管理）データを用いて分析したデータが公開された（ITmedia online: news017.html）。「トイレットペーパーが品薄になる」というデマが広まった頃のデータを見ると，特に 50 代と 60 代の増加率が大きく，平常時と比較して 40%以上の増加が見られた。したがって，COVID-19 禍でドラッグストアに殺到したのは中高年層が中心であったと言える。ただし，注目したいのは，他の年齢層においても，20%あるいは 30%以上の増加が見られるという点であり，買い占めや買いだめを行なっていたのは，決して高齢者だけではないということが分かる。

また，クロスマーケティング社が行なっている新型コロナウイルス生活影響度調査（Cross Marketing online）では，外出頻度に関する項目が尋ねられている。4 月に実施された第 3 回調査の報告書によると，外出の有無という点では，「外出していた」と答える人の割合が 60 代で最も高いという結果であった。一方，「毎日外出していた」あるいは「週に 5〜6 日外出していた」と答えた人の割合は，50 代，40 代，30 代を中心に高いという結果であった。この調査では外出理由について尋ねていないため，回答にある「外出」のうちどの程度が不要不急のものであったか判断することはできない。特に，外出の頻度が高かった 30〜50 代は，社会の中心的な働き手であるため，仕事上の理由でやむなく外出したという例も含まれていると推測される。したがって，外出の理由や内容を考慮に入れて解釈することはできないが，いずれの年代においても，ほとんど外出しなかったという人から毎日外出していたという人まで，さまざまな人が含まれていたということが分かる。

以上のことから，購買行動と外出行動のいずれにおいても，COVID-19 禍で問題視されるような行動をとっていたのは各年代の一部の人々であり，特定の年齢層ばかりがそれを行なっていたわけではないということが言えよう。

2.3. ギャップを生む要因

2.1. と 2.2. で見てきたように，社会で認識されている高齢者の行動と実際の行動との間には多少のギャップが見られる。これに関しては，以下のような要因が影響していると考えられる。

「高齢者が活動を自粛していない」，「高齢者が買い占めをしている」等，実際の状況から見て偏った情報が発信されていた背景には，「選択的知覚」というメカニズムが関係していると考えられる。選択的知覚とは，さまざまな情報のうち，自らの信念や予期に合致するものだけを知覚することを言う。例えば，「血液型と性格の間には関係がある」という「血液型性格学」などの研究に用いられており，対象者が血液型ステレオタイプに合致する情報に着目し，それに基づいた印象形成をするということが報告されている（坂元, 1995）。このように，特定のステレオタイプについて，その内容と異なる事象は無視し，内容と合致する事象ばかりに注目しようとするメカニズムが人には存在する。これによって，人々が持つステレオタイプは維持され，修正困難なものとなっている。COVID-19 禍では，未知の感染症に関して何か少しでも情報を得て安心しようと人々が必死になる中，デマなどの誤ったものを含むさまざまな情報が行き交っていた。このような混乱した状況でメディアや人々の選択的知覚が作用することによって，「高齢者は頑固だ」，「高齢者は騙されやすい」等の特定のステレオタイプに合致する情報ばかりが積極的に選択され，社会に発信されていたと考えられる。

3. 高齢者の行動に影響を与える心理的要因

第 2 節では，COVID-19 禍で高齢者がとる行動について，人々の認識と実際の状況との間に差が見られるということを説明した。ただやはり，高齢者の中でも一定の人々は，買い占めや不要な外出等を行なっているということも示唆された。そこで第 3 節では，どうしてそのような行動をとってしまうのか，その背景にある心理的要因について考察を行う。

買い占め等の行動が生じた背景には，少なくとも 2 つのプロセスが想定される。まず，初期に行動を起こした人々が一定数存在し，この時点での行動は主に性格などの個人特性によって決定されていると考えられる。そして，彼らの行動が過度に取り上げられたことで，より多くの人々が同様の行動を起こしたという二次的な影響が考えられる。後者について，以下で詳しく検討する。

3.1. Stereotype Embodiment Theory

COVID-19 禍では，「若者が外出を自粛していない」，「高齢者が買い占めをしている」というように，年齢層に焦点を当てた報道が頻繁になされた。このような報道によって，若者や高齢者など，特定の年齢層に関するステレオタイプが普段以上に強調されたということが考えられる。この状況を踏まえた上で注目したいのが，Levy（2009）によって提唱された，Stereotype Embodiment Theory（以下 SET）である。この理論は，高齢期に関するステレオタイプが，高齢期の実際の健康状態にどのような影響をもたらすのかということを説明するものである。この理論では，周囲を取り巻く文化への同化が心身の機能や健康に影響するような自己定義につながり，ステレオタイプが具現化されると説明されている。つまり，人々が高齢期に至るまでに認識するステレオタイプが，高齢期のさまざまな認知的および身体的側面に対して有益あるいは有害な影響を及ぼすということが指摘されている。

Levy（2009）によると，SET は 4 つの要素から説明されている。1 つ目は，ステレオタイプが生涯にわたって，つまり，幼少期から高齢期にかけて内在化されるということである。高齢者は，子どもにとって最もステレオタイプ化しやすい対象である上に，絵本をはじめとするさまざまな文化を通じて，人々は幼少期のうちから頻繁に高齢者についてのステレオタイプに触れる。また，このような経験を通じてステレオタイプを信じ込む過程は幼少期を越えても継続し，特に若い年代ではネガティブなステレオタイプの影響を受けやすいとされている。こうして幼少期からのネガティブなステレオタイプを高齢期まで持ち続けていると，高齢期の健康面や精神面に悪い影響が生じる。

2 つ目は，ステレオタイプが人々の無意識下で心身に影響を及ぼすということである。これまでの実験研究により，高齢者に対するステレオタイプが無意識のうちに活性化され，実際の心身の状態に影響を与えるということが示されている。例えば，高齢者に関するポジティブなステレオタイプを経験する群とネガティブなステレオタイプを経験する群において，延命治療に関する意思を尋ねた研究では，ネガティブな条件の高齢者は延命治療を拒否する傾向に，ポジティブな条件の高齢者は受諾する傾向にあった（Levy, Ashman, & Dror, 2000）。

3 つ目は，ステレオタイプへの自己関連性が生じることで，ステレオタイプの内容に一致するような影響が顕著になるということある。映画館でのシニア割引や社会保障の登録等で見られるように，高齢期の開始については，「65 歳以上」というように客観的な指標が定められている。そして，この指標は，人々が自分自身を高齢者として認識することにも寄与している。自身が高齢者であることを自覚すると，他の高齢者との同一視がもたらされ，高齢者へのステレオタイプに対する自己関連性が顕著になる。こうして，高齢者としてのアイデンティティが活性化されることで，自身の持つステレオタイプが自分に関連することとして意味を持ち，実際の心身の状態に影響するようになると説明されている。

4 つ目は，ステレオタイプがさまざまな経路を通じて人々の心身の状態に影響を及ぼすということである。具体的には，心理的，行動的，生理学的な 3 つの経路で影響力を発揮するとされている。まず，心理的経路では，高齢者に対するステレオタイプをもとにして生まれる予測が，予言の自己成就という

現象を通じて影響しているとされている。つまり，噂や思い込みなどの根拠のない予言でもそれを信じて行動することでその予言が実現するのだと考えられている。次に，行動的経路では，健康的な生活習慣を通じて影響するとされる。基本的に，高齢者に対するネガティブなステレオタイプは，健康上の問題が年をとる上で避けられないという仮定に基づいている。そのため，高齢者に対してネガティブなステレオタイプを持っている人は，健康的な習慣を無駄なものと見なしてそれらを実施しなくなるのだと説明されている。最後に，生理学的経路では，環境ストレスに反応する自律神経系が関与するとされている。ネガティブなステレオタイプにさらされると心血管反応が増加するため，これが繰り返されることで心血管イベントのリスクが増加し，高齢期の健康面に悪影響を及ぼすとされる。

そして，これら 4 つの要素で説明される stereotype embodiment の過程には，異なる 2 つのプロセスが含まれる。つまり，人々が社会のステレオタイプを内在化するプロセスについて，SET では，社会から個人へと影響するトップダウンの方向と，幼少期から高齢期へと影響する経時的な方向の 2 つが想定されている。

3.2. COVID-19 禍における stereotype embodiment

先にも述べたように，COVID-19 禍では，高齢者に関する特定のステレオタイプが強調されるという状況が生じていた。このような背景から，SET の枠組みを COVID-19 禍に当てはめて考察するということは，高齢者の行動に影響を与える心理的要因を検討する上で 1 つの有用な方法であると考えられた。

SET を COVID-19 禍に当てはめて考えてみた場合，以下のことが言える。まず，先に述べたように，SET では，社会から個人へのトップダウンの方向と，幼少期から高齢期への経時的な方向という，異なる 2 つの向きでの影響が想定されている。今回検討するのは，高齢者が幼少期から持っていたステレオタイプの影響ではなく，COVID-19 禍で社会に広がったステレオタイプの影響であるため，社会から個人へというトップダウンのプロセスに注目することになる。

また，先ほど説明した SET の 4 つの要素にも注目することで，このプロセスについてより詳細に考察することができる。具体的には，COVID-19 に関する情報をテレビやインターネットから得る中で，人々は無意識のうちに年齢を強調した報道に触れることとなったと考えられる。このように無意識のうちに知覚したステレオタイプは，「高齢者だから」という理由でテレビや周りの人から受ける非難や指摘によって自己関連性を増すであろう。こうして自分自身と関連付けられたステレオタイプの内容は，自分の行動に対する予測として機能し，実際の行動として現れる可能性が考えられる。

先に述べたように，SET では，高齢者が高齢期に対して抱くポジティブおよびネガティブなステレオタイプが，高齢期のさまざまな認知的および身体的アウトカムに影響を及ぼすとされる。SET について実証的に検討したこれまでの研究の中には，記憶課題を用いて認知機能的側面について検討したもの（Levy & Langer, 1994），心血管機能というような生物学的側面について検討したもの（Levy, Hausdorff, Hencke, & Wei, 2000），さらには，ソーシャルネットワークやソーシャルサポート等を比較することで社会的側面について検討したもの (Menkin, Robles, Gruenewald, Tanner, & Seeman, 2016) などがあり，いずれにおいてもネガティブなステレオタイプが高齢期の状態に悪い影響を及ぼすということが示されている。ここで，今回注目しているのは，COVID-19 禍における高齢者の行動であることから，アウトカムとして行動的側面に注目することが必要である。しかしながら，SET の実証研究の中で，アウトカムとして行動的側面を扱った研究はほとんど見られない。したがって，今回考察したプロセスを立証することは本稿では叶わない。高齢者がもつステレオタイプが，高齢者の実際の行動にどのような影響を与えるのかという点は，今後実証的に検討していくべき課題と言える。

4. COVID-19 禍における高齢者像

ここまで，高齢者の行動に影響する要因について考察してきた。SET の視点から，高齢者がとる行動には社会に広がるステレオタイプが影響しているという可能性が示された。そこで，そのような高齢者に対するステレオタイプのより具体的な内容について，再度例を挙げつつ述べる。COVID-19 禍において強調された高齢者像とはどのようなものであったか，時系列に沿って整理する。

COVID-19 が日本でも流行し始めた頃は，開店前の早朝から店の前に並んで日用品の買い占めを行う高齢者や，COVID-19 が発生・流行している状況にもかかわらず外出を控えない高齢者などが大きく取り上げられた。こうした状況から，この頃の高齢者は，感染の拡大や社会の混乱を招く存在，いわば COVID-19 禍における「悪者」と認識され，非難される対象であったと言える。ちなみに，2020 年 2 月 2 日のニュースで言われているように，日本での流行が拡大する以前は，海外からウイルスを持ち込む恐れがあるということから，外国人観光客に非難が集まる傾向があったと言える（Yahoo!ニュース online）。さらに，もともと日本に住んでいる人々を含めた外国人全体に対する排斥的な態度なども生じていた（Yamagata, Teraguchi, & Miura, 2020）。

その後，海外だけでなく日本国内でも症例が増えるにつれて，COVID-19 の具体的な症状や予防方法等についても明らかになり，ますます多様な情報が発信され始めた。特に初めの頃は，高齢者が感染した場合に重症化しやすいということが大きく報道された。これを受け，高齢者に対する社会の認識は，「悪者」から「守るべき対象」へと変化し，高齢者を感染から守るためにしっかりと対策をしようという風潮が強まった。社会全体にこのような風潮があったにもかかわらず，まだ外出を続ける一定数の高齢者には，相変わらず非難がなされていたが，それと同時に，この頃外出が目立った若年層が次の「悪者」として非難され始めた。

さらに付け加えると，自粛生活が続き，外出をしにくい状況が続いたことから，特に高齢者の健康に対する悪影響や，在宅中の詐欺被害に関する問題にも注目が集まるようになってきた（NHK online: k10012388261000.html）。その結果，「弱者」としての高齢者のイメージが強められた可能性が考えられる。

このように，コロナ禍ではさまざまなステレオタイプが次々と強調されていたと考えられる。ステレオタイプ化の過程において，人々は，年齢，性別，人種，国籍，職業のような，容易にかつ素早く識別できるような特徴によってカテゴリー化されている（Taguiri, 1969）。COVID-19 禍では，未知のウイルスに関して新しい情報が次々と発信され，社会全体が混乱していた。そのような状況の中で，効率よく情報を知覚する，あるいは知覚してもらうために，「年齢」のような人間の最も基本的な要素に注目したステレオタイプが強化されたのではないかと考えられる。ただし，このように，単純に 1 つの指標だけをもとにその人の特徴や能力を判断してしまうというのはステレオタイプの弊害であり，セクシズム（性差別），レイシズム（人種差別），そしてエイジズム（年齢差別）などの差別に発展する場合もある。中でもエイジズムは，他の 2 つの差別と比べて世間での認知度が低いとされており（Palmore, 1995），気付かないうちに広がり，深刻化してしまう可能性がある。

また，SET の経時的な方向の影響過程として説明したように，COVID-19 禍で強調されたステレオタイプが生涯を通して内在化され，この先高齢期を迎える人々の心身の健康状態に悪影響を及ぼす可能性がある。近年では，ステレオタイプが社会に与える影響を医療費などの具体的な数値を使って示し，その深刻さを社会に訴えようとする論文も見られる（Levy, Slade, Chang, Kannoth, & Wang, 2020）。このように，社会に蔓延しているステレオタイプは，高齢者個人だけでなく，社会全体に対して常に大きな影響を及ぼし続けている。COVID-19 禍のように，社会が不安に包まれ，混乱している状況において，人々が適切な行動をとることができるようにという点でもそうであるが，加えて，人々がより健康的で幸福な高齢期を迎えることができるようにという点からも，受発信する情報の選択や日頃から接しているステレオタイプへの認識を再度見直していくことが必要である。

5. 結論

本稿では，COVID-19 禍における高齢者の行動について検討した。ここでは特に，SET に注目し，社会に蔓延したステレオタイプが高齢者の行動に影響を与えるというプロセスについて検討した。

本稿の内容は先行研究の知見をもとにした考察に過ぎず，ここで提示したプロセスの有用性については，実験等を行なって実際に検討する必要がある。また，今回扱ったのは COVID-19 禍における行動であったことから，実験の際には，不安感情が高い，あるいは混乱している状態であるという背景要因も合わせて検討することが必要であり，それによって新たな知見が得られることが期待される。

参考・引用文献

Cross Marketing (2020). 第3回新型コロナウイルス生活影響度調査 Cross Marketing Retrieved from https://www.cross-m.co.jp/report/health/20200417corona/ (2021 年 1 月 19 日)

服部 良祐 (2020) 高齢者は朝のドラッグストアへ本当に「殺到」したか 購買データで解明 ITmedia ビジネスオンライン Retrieved from https://www.itmedia.co.jp/business/articles/2005/02/news017.html (2021 年 1 月 19 日)

飯塚 真紀子 (2020).「日本の最低な態度にゾッとしたわ」 人種差別発言「#中国人は日本に来るな」米紙報道 Yahoo! JAPAN ニュース Retrieved from https://news.yahoo.co.jp/byline/iizukamakiko/20200202-00161399/ (2021 年 1 月 19 日)

厚生労働省 (2020). 新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」の実践例を公表しました 厚生労働省ホームページ Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_newlifestyle.html (2021 年 1 月 19 日)

厚生労働省 (2004). 平成 16 年版厚生労働白書 第 2 章 厚生労働省ホームページ Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/04/dl/1-2.pdf (2021 年 1 月 19 日)

Levy, B. (2009). Stereotype Embodiment: A Psychosocial Approach to Aging. *Current Directions in Psychological Science*, *18(6)*, 332–336. https://doi.org/10.1111/j.1467-8721.2009.01662.x

Levy, B., & Langer, E. (1994). Aging Free From Negative Stereotypes: Successful Memory in China and Among the American Deaf. *Journal of Personality and Social Psychology*, *66(6)*, 989–997. https://doi.org/10.1037/0022-3514.66.6.989

Levy, B. R., Ashman, O., & Dror, I. (2000). To be or not to be: The effects of aging stereotypes on the will to live. *Omega*, *40*, 409– 420.

Levy, B. R., Hausdorff, J. M., Hencke, R., & Wei, J. Y. (2000). Reducing Cardiovascular Stress With Positive Self-Stereotypes of Aging. *The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, *55(4)*, 205–213. https://doi.org/10.1093/geronb/55.4.P205

Levy, B. R., Slade, M. D., Chang, E. S., Kannoth, S., & Wang, S. Y. (2020). Ageism Amplifies Cost and Prevalence of Health Conditions. *The Gerontologist*, *60(1)*, 174–181. https://doi.org/10.1093/geront/gny131

Menkin, J. A., Robles, T. F., Gruenewald, T. L., Tanner, E. K., & Seeman, T. E. (2016). Positive Expectations Regarding Aging Linked to More New Friends in Later Life. *The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, *72(5)*, gbv118. https://doi.org/10.1093/geronb/gbv118

NHK (2020). 愛知 特殊詐欺被害が増加 外出自粛の高齢者狙いか 新型コロナ NHK ニュース Retrieved from https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200415/k10012388261000.html (2021 年 1 月 19 日)

Palmore, E. B. (1990). *AGEISM: Negative and Positive*. New York, NY: Springer Publishing Company. (パルモア, E. B. 奥山正司・秋葉聰・片多順・松村直道 (訳) (1995). エイジズム 法政大学出版局)

坂元 章 (1995). 血液型ステレオタイプによる選択

的な情報使用―女子大学生に対する 2 つの実験―実験社会心理学研究, *35(1)*, 35-48.

産経デジタル (2020). 繁華街練り歩く「若者」Vs 買いだめに並ぶ「高齢者」 新型コロナで“世代間闘争”、自粛続きに不満爆発寸前！ iza 総合ニュースサイト Retrieved from https://www.iza.ne.jp/kiji/life/news/200328/lif2003282000003 7-n1.html (2021 年 1 月 19 日)

関谷 直也 (2012). 東日本大震災後の不安と情報行動(災害と情報) 情報の科学と技術, *62(9)*, 372–377. https://doi.org/10.18919/jkg.62.9_372

総務省統計局 (2020). 統計トピックス No.126 統計からみた我が国の高齢者ー「敬老の日」にちなんでー 統計局ホームページ Retrieved from https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1260.html (2021 年 1 月 19 日)

週刊 SPA！編集部 (2020). 新型コロナで買い占め暴走する老人たち。身勝手な行動は高齢者から!? MSN ニュース Retrieved from https://www.msn.com/ja-jp/news/opinion/新型コロナで買い占め暴走する老人たち。身勝手な行動は高齢者から/ar-BB11W55a (2021 年 1 月 19 日)

Taguiri, R. (1969). Parson perception. In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.), *Handbook of social psychology, Vol. 3*. Reading, MA: Addison-Wesley.

滝島 雅子 (2020). 「新型コロナウイルス」関連のことば ー「コロナ禍」の使い方ー NHK 放送文化研究所 Retrieved from https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/20200701_4.html (2021 年 1 月 19 日)

Yamagata, M., Teraguchi, T., & Miura, A. (2020). The Relationship between Infection-Avoidance Tendencies and Exclusionary Attitudes toward Foreigners: A Panel Study of the COVID-19 Outbreak in Japan. 1–36. https://doi.org/10.31234/osf.io/x5emj